出典:「alterna」 No.36 2014年5月号

オルタナティブ

経営論 2

文◉田坂広志
text = Hiroshi TASAKA

たさか・ひろし◉81年、東京大学大学院修了。工学博士。87年、米国バテル記念研究所客員研究員。90年、日本総合研究所の設立に参画。取締役・創発戦略センター所長等を歴任。00年、多摩大学大学院教授に就任。同年シンクタンク・ソフィアバンクを設立。03年、社会起業家フォーラムを設立。08年、世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilのメンバーに就任。著書に『目に見えない資本主義』『未来を予見する5つの法則』など60冊余。

「目に見えない資本」を重視する日本型経営

資本主義は、もっと成熟しなければならない。

それは、リーマンショックの後、世界中の人々が感じたことであるが、では、「成熟した資本主義」とは、いかなる資本主義であろうか?

その答えを知るための、一つの問いがある。

「成熟した精神」とは、何か?

それは、「目に見えない価値」を大切にする精神のこと。

例えば、我々は、精神が未熟な時代には、言葉で表せない「叡智」の大切さを理解することができない。「縁」と呼ばれるような人間同士の深い結びつきの価値を理解できない。「信頼」や「評判」や「文化」というものの重要性も分からない。

しかし、我々の精神は、成熟するに従って、こうした「目に見えない価値」の大切さに気がつくようになっていく。

されば、「成熟した精神」が「目に見えない価値」を大切にする精神であるならば、「成熟した資本主義」とは、「目に見えない資本」を大切にする資本主義のことであろう。

では、「目に見えない資本」とは何か? 五つの資本を挙げよう。

第一が、「知識資本」。社員の持つ知識や智恵は、目には見えないが、企業にとって大切な資本である。

第二が、「関係資本」。社員が必要な知識や智恵を持っていなくとも、そうした知識や智恵を持つ人々や組織との関係を持っているならば、この関係資本は、いずれ知識資本になっていく。

第三が、「信頼資本」。社外の人々や組織との関係を築くためには、その社員や企業に対する信頼が無ければならない。従って、この信頼資本とは、関係資本を増やしていくために極めて重要である。

第四が、「評判資本」。社員や企業に対する信頼が無くとも、その社員や企業が社会的に高い評判を得ているならば、そこに信頼は生まれやすい。すなわち、評判資本は信頼資本へと変わっていく。

第五が、「文化資本」。その企業に、社内で知識や智恵を共有し、社外の人々とも知識や智恵を自由に交流する文化があるならば、その企業は、「目に見えない資本」を有効に活用することができる。

このように、「知識」「関係」「信頼」「評判」「文化」というものは、企業にとって「目には見えない」が、重要な資本である。そして、昔から、優れた経営者は、その企業の中にある、これらの「目に見えない資本」を見つめ、大切にし、その資本を増やすための努力をしてきた。

特に、日本型資本主義や日本型経営と呼ばれるものは、古くから、この「目に見えない資本」を重視し、活用してきたのである。

次回、そのことを語ろう。